福島市立清明小学校　　学校だより　令和３年１月２９日　第４３号　　〈文責〉校長

**みんなとともに笑顔いっぱい**　ー「１０１」新たなるステージへ ー

# みんなとともに

最近気づいたことがあります。それは、子どもたちの水曜日の登校時刻が、全体的に早いのです。遅刻しがちの子も、余裕をもって間に合っているようです。「水曜日」の特徴は、下校時刻が他の曜日よりも早いこと、そして週の折り返しだということです。そんな心理的負担の有無が、子どもの行動に現れているのかもしれません。水曜日の一斉下校の効果を思わぬ形で見つけました。

〈令和２年度「本校教育活動」の検証　その１〉

## 本校児童は、進んで本を読んでいるか

次は、保護者対象「学校評価アンケート」の「進んで本を読んでいるか」の評価です。

**【第２回 学校評価アンケート（保護者）】　「進んで本を読んでいるか」　評価平均 ２．９**

| | よくあてはまる(4点) | だいたいあてはまる(3点) | あまりあてはまらない(2点) | 全くあてはまらない(1点) |
|---|---|---|---|---|
| 保護者 | ２８％　（５１名） | ３７％　（６７名） | ２９％　（５２名） | ６.６％　（１２名） |

この項目の評価は、他に比べて低い結果が出る傾向にあります。実際はどうなのか、毎年１１月に「１ヶ月間に読んだ本の冊数」を調べる「読書に関する調査」を行っているので、その結果を見てみました。

**【１ヶ月に読んだ冊数の平均（１１月）】**

| | | 平均読書冊数 | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 本校 | R2年度 | １４．５冊 | 22．3冊 | 8．1冊 | 13．9冊 | 7．1冊 | 15．1冊 | 17．9冊 |
| 本校 | R1年度 | ８．３冊 | 12．2冊 | 7．8冊 | 8．4冊 | 14．3冊 | 5．2冊 | 1．4冊 |
| 県 | R1年度 | １１．２冊 | 15．6冊 | 15．1冊 | 12．4冊 | 10．4冊 | 7．6冊 | 6．7冊 |

**【１ヶ月間の読書冊数（１１月）】**　＊ 学校及び家庭等での読書冊数の合計　〈単位〉人

| | | 0冊 | 1冊 | 2冊 | 3冊 | 4冊 | 5冊 | 6冊 | 7冊 | 8冊以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 本校 | １年 | 0 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 | 1 | 3 | 24 |
| 本校 | ２年 | 3 | 3 | 2 | 0 | 4 | 4 | 2 | 1 | 13 |
| 本校 | 3年 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 2 | 2 | 1 | 17 |
| 本校 | ４年 | 2 | 1 | 0 | 3 | 3 | 1 | 0 | 0 | 14 |
| 本校 | ５年 | 0 | 1 | 0 | 1 | 4 | 7 | 1 | 3 | 17 |
| 本校 | ６年 | 2 | 0 | 4 | 5 | 4 | 0 | 4 | 3 | 17 |
| 本校 | 計 | 7<br>3．7% | 5<br>2．7% | 10<br>5．3% | 10<br>5．3% | 18<br>9．6% | 14<br>7．5% | 10<br>5．3% | 11<br>5．9% | 102<br>54．5% |
| 県(R1年度) | | 1．5% | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | 50．9% |

〈分析〉　平均読書冊数は、昨年度と比べ、増加している。また、県平均（昨年度値）と比べ、上回っている。特に、今年度は高学年の読書冊数に大きな伸びが見られる。全体で８冊以上読んでいる児童は５０％以上おり、県平均を上回っている。半面、「０～１冊」の児童が６．４％いるが、これが保護者の「全くあてはまらない」の評価にあたると見られる。

次年度は、１１月に限らず、どの子もコンスタントに月４冊（週１冊）以上の本を読むことを目標に、意欲を喚起する工夫をしながら、読書指導にあたっていく必要がある。

**【校長のつぶやき】　その５５　「子どものため、とは」**

初任校でのことである。ＰＴＡ会長の家は、学校から一番遠いところにあった。そのころは、保護者との飲み会がよくあったのだが、ある飲み会でたまたま席が隣になった。だいぶ酒も入ってきたころ、会長が私に言った。「先生、もうすぐ娘は卒業するけれど、学校に入ってから雨が降っても雪が降っても、一度も車で送っていったことはないんだ。学校まで遠くてかわいそうだと思うけれど、車で送っては娘のためにならないと思って、ぐっとがまんするんだ。」という話だった。「なるほど、そういう考え方もあるのだ」と、若かった自分には新鮮な驚きであったことを覚えている。

翻って、自分はどうかというと、子どもが学生時代は完ぺきな“アッシー君”であった。「送って」と言われればホイホイと、言われなくてもホイホイと。さらには、子どもがつまずかないように、困りそうなことは先回りして手助けをしていた。子どもが成人した今も、笑われるような“あまい”親である。

「何が子どものためか」は、人それぞれである。ただ大切なことは、「将来どんな状況にあろうとも、強くしなやかに自分の足で人生を歩くことのできる自立した大人に育てること」だと思っている。